

育児支援のパターン・ランゲージ

A Pattern Language for Raising-Children Activity

中條紀子[†], 井庭崇[‡]
Noriko Chujo, Takashi Iba

[†]慶応義塾大学, [‡]慶應義塾大学
Keio University, Keio University
nc@sfc.keio.ac.jp, iba@sfc.keio.ac.jp

Abstract

This paper proposes a pattern language as a new method of supporting parents. We analyze the tacit knowledge of parents on the basis of sociological theory.

Keywords — Raising-Children, Parent, Communication, Pattern Language

1. はじめに

本研究は、育児活動における暗黙知を社会学的理論に基づいて分析し、その一連の方法とメカニズムをパターン・ランゲージとして記述する。文献調査とヒアリングから、育児活動には「親」と「子」という二つの存在が必須であり、互いに影響を及ぼすことで関係性を保っているという示唆を得た。本研究は、この考察を実際に利用可能なツールとして記述することで、新たな育児支援のあり方の構築を目指す。

2. 背景

育児に関する社会学的考察は既に、文化、福祉、ジェンダーなどあらゆるテーマで取り上げられている[1]。また、親子関係の観察は臨床心理学から多くの報告がなされている[2]。しかし、これらの考察結果は、現実社会と距離を置くか、トップダウン的政策の必要性を訴えることに終始し、当事者が個人の力で問題解決に取り組める結論が提示されていないものが多い。この課題を解決するため、本研究は、社会学的考察を踏まえた上で、独自のパターン・ランゲージを提案する。

3. 手法

本研究は、5人の親¹を対象に、育児に関する聞き取り調査を行った。それに加え、育児のノウハウ本[3]やインターネットサイト²で多くあがる意見の一般性を抽出し、パターン作成の根拠とした³。また、分析のフレームワークには、近代のコミュニケーション理論であるシンボリック相互作用論や社会システム理論を援用し、それを科学的根拠とした上で、2つのパターン⁴を作成した。

パターン・ランゲージは、建築の方法論を起源[4]とし、現在ではソフトウェア開発などの分野に応用されている[5]。知識共有や創造性を支援するツールとしてその有効性が論じられており[6]、個人に働きかけることを目指す本研究の手法として、妥当であると考えられる。

4. 調査結果

インタビューは、育児に関する悩みや問題、心がけていること、自分はどう育てられたか、ということを中心に語ってもらった。家庭環境の違いによって、さまざまな問題が挙げられたが、中でも、「子どもにイライラさせられたことがある」という経験は共通して聞き取れた。しかし、そのような不満だけでなく、喜びもまた育児を通して初めて経験することがあり、総じて育児活動に関し、「子どもから学ぶことが多い」「子どもに育てられている気がする」という発言が得られた。参考文献にも多くそのような体験談が載せられているほか、親としての経験値を「ママ歴〇年」と

¹ 2009年3月までに子どもが3歳以下という条件

² 「ムギ畑」<http://www.mugi.com/>など

³ パターン・ランゲージには、お互いに参照しない3つ以上の発言や記述を根拠としなければならないというルールがある。

⁴ 付録参照

表記することがある。これらのことから、育児活動者は、子どもと触れ合うことによって「親」として育っていくものだと考えられる。

5. 考察

子どもは自由に振舞っているにもかかわらず、育児に関わる過程で、親は「子どもに育てられている」と感じている。これに関し、「人間は、ある事柄が自分にとって持つ意味にもとづいて行為する」と主張するシンボリック相互作用論という立場がある[7]。すなわち、親が自らを「親」として認識するためには、対象である子どものふるまいを「わが子のふるまい」と認知した上で、それに対する「親としての自分のふるまい」を決めるということである。また、N・ルーマンの社会システム理論[8]では、「コミュニケーション」とは発信者の意図に関わらず、受信者の捉え方によって決定されるものであると定義されている。これらのことから、「親」の意識が親子関係の維持に大きく関わっていると考えられる。そのため、パターンを「子どもの態度をどう受け取るか」、そして「具体的な親としてのふるまいはどうすればよいか」という点に絞って作成した。

6. パターンの作成と今後の課題

本研究で作成したパターンのフィードバックコメントに「いつも思っていることなので目新しさは無いが、皆が同じように考えてくれればと思う」とあった。したがって今回のパターンでは、大きな「気付き」は与えられなかったものの、ある親の考えを代弁できているという点では妥当であると考えられる。家庭環境は多様であるため、個別具体的な解決策を提示するのは難しい。しかし本来、パターン・ランゲージは、多くの選択肢の中から各人が自らの状況に合わせて取捨選択し、自分なりの行動様式を作り上げるものである。本研究も、今後はさまざまな家庭環境を考察した上でさらに多くのパターンを記述し、育児活動への貢献を目指す。

付録：パターンの概要

(1) 「Be as You Are」

子どもが言うことをきかず、イライラしてしまうときに使用。不満の原因は、自分が「親／子どもはこうあるべき」というイメージを想定しているからかもしれない。自分は子どもに「親」として育てられていると認識し、子どものふるまいを受け入れることで自分の成長につなげる。

(2) 「Pay it Forward」

子育てで何をしたいかわからないときに使用。育児活動とは、多くの人間が試行錯誤しながら続いてきたものである。そのため、周りの親を観察したり、自分はどう育てられたかを思い出したりすることで、行動のきっかけにする。

参考文献

- [1] David Cheal (2002) "SOCIOLOGY OF FAMILY LIFE", Palgrave Macmillan
- [2] 高石恭子編著 (2007) "育てることの困難", 人文書院
- [3] 大日向雅美 (1993) "子育てがいやになるときつらいとき", 主婦の友社
- [4] C.Alexander and S.Ishikawa and M. Silverstein (1977) "A PATTERN LANGUAGE: Towns, Buildings, Construction", Oxford University Press
- [5] E.Gamma and R.Helm and R.Johnson and J.M.Vlissides (1994) "Design Pattern: Elements of Reusable Object-Oriented Software", Addison-Wesley Educational Publishers Inc
- [6] 井庭崇, (2007), "コミュニケーションの連鎖による創造とパターン・ランゲージ", 社会・経済システム学会誌, vol.28, pp.59-67
- [7] Herbert Blumer, (1969), "SYMBOLIC INTERACTIONISM: Perspective and Method", University of California Press
- [8] Niklas Luhmann (1984) [佐藤勉訳(1995)] "社会システム理論 (上・下)" 恒星社厚生閣